公開用

滋賀県文化審議会次世代育成部会第９回会議　議事録

１　日　時　　平成 27 年 3 月 18 日（水）10:00～11:30
２　場　所　　大津合同庁舎６Ｂ会議室
３　出席者　　委員：辻部会長、木下委員、杉江委員、中島委員、宮本委員
　　事務局：総合政策部次長、総合政策部管理監ほか
４　議事録　　以下のとおり

■　次長挨拶
■　議　題
（１）議題１　平成２６年度次世代育成施策の実施状況について
〇事務局
（資料１について説明）

〇委員
・ホールの子事業についてはプログラムのやり方をできるだけお客さんの反応を見ながら改善していくことが大事。回数もどんどん増えていって、２回に分けるというのも非常にいい試みだと思う。この事業はぜひ続けて欲しい。
・しかし、びわ湖ホール声楽アンサンブルの方が学校に出かけていく事業の方がより効果があると思っている。出かけていくことは重要である。この事業も続けてほしい。
・「学校にアートがやってきた」事業については、アーティストと学校を繋ぐコーディネーターがいないということが気になる。外部から人が来るということを学校は嫌うので、丁寧に仲介できる人が重要。
・アーティストの特徴や素養をまとめたデータベースと、事業をやってみたい方のデータベースを作ってみてはどうか。能力に合ったアーティストに学校に来てもらい、相乗効果を出せるようになればいい。
・「文化芸術の力を教育に」推進モデル事業は日本に誇れる事業です。この事業は引き続き支援いただきたい。
・この事業はプライバシーの関係から実施風景を映像でそのまま外部に出すことはできないが、文章で効果や仕組を伝えられたらいい。学校に行けなかった子どもが、学校に戻ってきて、なおかつ自分と同じ問題を持っている子どもに指導するという効果まで出ている。非常にピンポイントな事業であるが、現代の社会の中で必要な機能になるものだと思う。

〇委員
・子どもたちのいる学校に出向いて演奏会をする方が、より子どもたちの心に響くと思っているので、ホールの子事業には懐疑的であった。しかし、この事業を長年続けてきたことに意味が出てきているし、びわ湖ホールでオーケストラの演奏を体験すると

いう機会もめったにないということから、この事業の大切さも分かり始めてきた。

・「学校にアートがやってきた」事業は、子どもと芸術家双方に対する効果を狙うということはやめた方がいいと思っていたが、共に学ぶということを目指して実施するということを聞いて納得した。アーティストの人間性によって子どもに伝える力が全く変わってくるので、アートマネジメントの方がしっかり選定をし、派遣すべき。

・「文化芸術の力を教育に」事業に参加した一人の男の子が、事業終了後に毎週音楽教室で練習を積み重ね一年後のクリスマスイベントで人前に出て一人で歌を披露した。学校にも行けるようになった。何がきっかけでその子が変わったのかはっきりとはわからないが、このプロジェクト自体が素晴らしいもので世界に誇れるものなので滋賀県発祥のものとして続けるべき。

〇委員

・「学校にアートがやってきた」事業はアーティストの適性が必要。ただ子どもたちにとっては、先生以外にこういう教え方をする人もいるという新しい発見ができることは非常にいいこと。自分が知らない新しいキャラクター性を持った、クリエイティブな人たちがいるのだという驚きは社会を知るきっかけづくりにはいい。

・先生方はアーティストが教えたことをきちんと仕上げないといけないという義務感があり、楽しそうでない。仕上がらずに途中であっても、子どもたちの感受性にまかせればいいと私は思うのだが。

・ホールの子事業は本当にいい試みで、ここまで増えてきたとういうことに評価したい。

・ホールの子事業も「学校にアートがやってきた」事業も学校側のその後の学びに繋いでいくことが大切。学校の先生に子どもたちが音楽会に来た後どのような音楽活動をしたのかを評価できる資料が欲しい。これにより、行かせて終わりではないという先生の意識づけもできるのではないか。

・日本の学校は多様性を求めない。これからの日本を考えていく上で色んな人を受け入れられるような素地を学校教員に作っていかなければいけない。

〇部会長

・必ずしも良い作家が教えることが良い影響を及ぼすとは限らない。例えばあまり良い評価をされていない造形家のほうが教育をうまくできることもある。

（２）議題２　次期滋賀県文化振興基本方針について

〇事務局

（資料２～５について説明）

〇部会長

・基本方針は来年度で終わりということで、次期基本方針は一から考えるということですか。

○事務局

・審議会においても議論いただいたが、現方針はよくできているということで、現基本方針をベースに検討いただき、重点施策の枠組などはこれからの議論の中で考えたい。

○部会長

・わたしのほうから問題提議すると、この次世代育成部会の次世代とはどの年代からと考えているのかという部分を不明確なまま進んできた。年代を絞り込むというのも一つの方法ではないか。それによって滋賀県の特徴を出せるかもしれない。

○委員

・現行の重点施策では、若手芸術家の育成支援といいつつ、受け手を育てていく部分と、芸術家として発信して育てていく部分と両方が入れこまれている。両方必要だが、混ぜていることで質の高い若手芸術家を育てることが逆にぼやけている。

○部会長

・次の方針では特色を明快に出してアピールすべき。滋賀県の文化政策は先端ではなく平たくチャンスを与えていくところに重点を置くというアピールの仕方も特色の一つではないか。みなさんの意見を伺いたい。

○委員

・重点の置き方はそれぞれの時代や地域によって変わるが、滋賀県にどういう人材がいるのかが分からない。人材一覧のデータがあればいいのだが。
・滋賀県は長い歴史があり、古い文化を継承している人から最先端の人まで重層的な歴史の流れを持つ広がりがある。そういう特色を生かす重点施策があってもいい。

○委員

・古いものを継承しつつ新しいものに着手し現在に至っている。これは滋賀県の特徴で、そういう歴史の厚みを感じさせるものが滋賀ブランドではないか。
・重点施策に「文化力の向上による滋賀ブランドの構築」とあるが整理ができておらず、表現も分かりにくいのではないか。

○委員

・以前学校で、少し難しい本格的な曲を演奏した。子どもたちはポカンと口を開けて集中して聞いてくれていたが、演奏後に先生が「この曲難しかったね」と発言された。これは子どもたちの創造力を一切合切消してしまう言葉。先生は悪気なくおっしゃっていたので、先生方にも文化を伝える研修が必要だと思う。

○部会長

・文化ボランティアの方もはじめのうちはそういう言い方をする。教員は子どもと一緒にスタートして感情を聞き出してやれるかどうかが大事。

〇委員

・伝統文化の魅力はちょっとやるくらいでは伝わりきらないが、何もかも徹底的にやろうとすると力が分散される。ある点に焦点をあてて、そこだけはおもしろいものにするという考え方が次の５年にあってもいい気がする。

〇部会長

・2020 年のオリンピックでみんなが目指しているのは最先端を狙うことだが、伝統から掘り起こしたものは力があり、滋賀県はその素材と力を持っている。
・伝統の担い手を徹底的に育て、それにまつわるモノ作りを進め、ビジュアル化していけば可能性の秘めたものが見えてくるのではないか。それらが総合的に浮かびあがってくると、ステップアップするのではないかと思う。

〇委員

・先の見えない未来より安定した未来というのは魅力である。

〇部会長

・何をやっているか見えないので、滋賀県がどんどん外に向けて発信することで滋賀ブランドになる。

〇委員

・滋賀県は広告力が不足している。アピールすることで県民も再認識させられる。

〇委員

・滋賀県は学校と施設がかなり融合して活動でき、文化がかなり育っている県だと思う。施設のマネージメントが変われば学校そのものも変わる可能性があるのではないか。
・今は子どもたちを対象に事業をしているが、それが地域創造に貢献していく可能性も十分にある。
・人材育成にも色んなレベルがあるので、しっかり精査をしながら、若者が情熱を持ってやりたいことが叶えられる制度を持つことが重要。
・勉強したが働き口がないという問題がある。商業ベースでのニーズをしっかり受け止めて繋いでいくようなしくみを作らなければならない。
・支援制度、派遣制度、ニーズの発掘をしっかりやりつつ、ハイクラスの人はもっと上を目指せるようなしくみを考えたらいいのではないか。
・美の資源の発信が美術館だけで終わってしまわないようにすべき。
・『湖国と文化』のような紙媒体と最近のネット環境をうまく利用していきながら、リアルタイムな情報発信をしてほしい。
・学校側の門戸を開くための窓口を置くなど学校連携における新たな制度をつくるのもいいのではないか。

○委員

・情報誌がおしゃれであることは大切。『湖国と文化』はローカリティーがあるが手に持って散策するには不向きなので、持ち運び易さは大事。

○部会長

・美術館というのは次世代部会で考えている活動を行う場に十分なり得るし、その活動が新生美術館の宣伝になる。また、美術館の活動を受けて育った若者が成長して美術館に貢献してくれるということもあるかもしれない。

○委員

・アール・ブリュットが滋賀を代表する美として扱われることになっているが、障害を持った子どもとそうでない子どもとの作品が異なるとは感じられない。同じ次元で展示することが大事なのではないか。

・アール・ブリュットを滋賀独特の美と謳いあげることが正しいのかということもある。

○部会長

・子どもの芸術の分野まで広く捉え、日常的に美術館に取り扱えればいい形になるのではないか。その際にはコーディネーターが必要になると思うが。

○委員

・コーディネーターに関しては文化芸術センターが研修機関になり得る。3 年間なり研修を積めば一人前に育つ。滋賀県はそういう要素を持っているので強みを生かせばいい。

○部会長

・広報の専門委員会を作ったほうがいいかもしれない。戦略として必要。作家だけでなく作家の周りに、ボランティアも含めどれだけ支える人がいるかが本当の文化力だと思う。

（以上）